

平成30年5月8日現在

機関番号：15401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06997

研究課題名(和文) アリストテレス自然学のアラビア語およびラテン語における伝承の文献学的研究

研究課題名(英文) Reception of Aristotelian Physics in Arabic and Latin

研究代表者

三村 太郎 (Mimura, Taro)

広島大学・総合科学研究科・准教授

研究者番号：50782132

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：アッバース朝宮廷占星術師マーシャアッラーフに帰せられた『天球について』アラビア語テキストの校訂とその英訳を完成させた。さらに、本作品の内容を分析することで、真の著者ドゥーナシュ・イブン・タミームの宮廷科学者としての役割が見えてきた。ドゥーナシュは『天球について』において天体運動を含めた自然現象の発生過程をギリシャ哲学や天文学の知識を使って合理的に説明し、このような合理的で素晴らしい世界を創造できるのは、全知全能の唯一神しか不可能である、という議論を展開することで、神の存在を証明しようとしたことが分かった。

研究成果の概要(英文)：In this research project, I focused on editing the Arabic original of Liber de orbe, which was traditionally attributed to Mashaallah, an astrologer in the Abbasid court, as well as translating the Arabic text into English. Since this work was not written by Mashaallah, but by Dunash ibn Tamim, a Tunisian court physician, the analysis of the whole contents of this work revealed Dunash's aim of composing this work: by explaining the rationality of the whole natural phenomena, he concluded that this rational world cannot be created except by the wisest one God. That is, this work was written for providing a proof of the existence of the one God.

研究分野：古代中世科学史・アラビア語文献学

キーワード：アラビア語写本 イスラーム科学史 アリストテレス自然学

1. 研究開始当初の背景

中世ラテン世界にアリストテレス自然学とそれに基づく宇宙観を伝えた最初期のラテン語作品として、アッパース朝宮廷占星術師マーシャーアッラフ(800年頃活躍)に帰せられた *Liber de orbe* (『天球について』) が挙げられる。この作品は、いわゆる「十二世紀ルネサンス」の翻訳活動の中核を担ったクレモナのゲラルドによってラテン語に翻訳されたものとして知られ、アリストテレス自然学を学ぶ際の教科書として、さまざまな大学で数多くの学生たちによって読まれることで、中世ラテン世界のアリストテレス哲学受容のきっかけとなった。それゆえ、本作品の分析は、ヨーロッパにおける哲学の大きな伝統をなしたアリストテレス主義の展開を見るうえで、なくてはならないものであることは言うまでもない。(本作品の重要性については、Barbara Obrist, “Twelfth-Century Cosmography, the De secretis philosophie, and Mashā’ allāh (attr. to) Liber de orbe”, *Traditio* 67 (2012): 235-276 や Shlomo Sela, “Maimonides and Mashallah on the Ninth Orb of the Signs and Astrology,” *Aleph* 12 (2012): 101-134 などが指摘するところである。) その一方で、そのアラビア語原典は、いまだかつて同定されてこなかったため、ラテン語版『天球について』の研究は遅々として進まず、ラテン語本文の校訂版もいまだ公刊されていない。しかし、哲学や科学に関する膨大なアラビア語写本を調査する過程で、私は、世界ではじめて、そのアラビア語原典を収録した写本をベルリンとフィラデルフィアの各図書館で同定することができた。すなわち、ベルリン Staatsbibliothek zu Berlin, Ms. or. oct. 273 とフィラデルフィア Pennsylvania University Library, MS LJS 439 の2写本である。その内容を見てみると、著者が938年に発生したアンダルス地域での日食を報告していることから、マーシャーアッラフをその著者とすることはできないことがわかった。そのため、著者を同定する手がかりを探ると、本書においてアンダルス地域の情報が豊富であり、その使用するアラビア語にマグリブ地域の特徴が見られることから、著者の有力な候補として、現在のチュニジア近辺で活躍したユダヤ教徒ドゥーナシュ・イブン・タミーム(955以降没)を見つけた。ドゥーナシュの伝記情報は乏しいが、現在、彼の2つの著作が伝わっている。すなわち、ヘブライ語創造神話書『生成の書』に対するアラビア語での注釈書『生成の書注釈』と、天文観測器具アーミラリー天球儀の取扱説明書『アーミラリー天球儀について』である。そのうち、『生成の書注釈』は、その7割ほどはヘブライ文字で書かれたアラビア語写本で現存する一方、数種のヘブライ語訳で伝わっている。この注釈書と『天球について』アラビア語原典とを比較すると、両

者に見られる占星術への態度や天文学的な内容が一致することから、ドゥーナシュが『天球について』の著者であることを確定した。さらに、この注釈書において、彼がすでに2種類の宇宙論書を書いたことに言及しており、そのうちのひとつであるファティマ朝カリフに950年頃献呈した『天球の構造について』には占星術論駁の章をもうけたと述べている。他方、『天球について』アラビア語原典において、占星術論駁の文脈で「論駁の詳細は後述する」としながらその詳細は本書内には見つからないことから、2写本で現存する『天球について』アラビア語原典は『天球の構造について』のはじめの部分を抜き出したものだと結論付けた。『天球について』の著者がドゥーナシュであるということは、そのラテン語版がアリストテレス自然学を伝えるラテン語作品として最初期のものであるだけでなく、そのアラビア語原典自体も、アリストテレス哲学を中心としたギリシャ哲学・天文学に基づいたコスモロジーを伝えるアラビア語作品として、とりわけアンダルス地域やマグリブ地域において、現存する中で最初期のものであることを示すため、本作品が中世ラテン哲学史・科学史はもとより、イスラーム科学史・哲学史においても重要な資料として扱われるべきであることがわかった。そこで、発見した2アラビア語写本を文献学的に精査し、学术界で長年希求されてきた『天球について』アラビア語原典の校訂を目指し、さらに本作品の重要性を鑑みて、幅広い研究者の利便を供するために、その英訳を行おうとした。

2. 研究の目的

本研究は、発見した2写本の詳細な文献学的研究を行い、『天球について』アラビア語原典の本文校訂を完成させることを主眼とした。加えて、本作品のラテン語訳はヨーロッパ世界のアリストテレス受容の最初期を担ったことから、アラビア語を解さないヨーロッパ哲学史・科学史研究者たちにとっても重要な文献であるため、幅広い研究者たちの利便に供するべく、アラビア語原典全体の英訳と注釈を試みた。さらに、『天球について』アラビア語原典の校訂版を完成させた後は、その内容分析を通じて、アリストテレス自然学がイスラーム世界にどのように受容されたのかを明らかにする一方、本作品のラテン語訳とアラビア語原典とを比較することで、アリストテレス哲学受容に際して、本作品が中世ラテン世界でどのように読み解かれたのかをも明らかにすることも目指した。一方、『天球について』は、ファティマ朝カリフへの献呈書であったことから、本作品は、著者ドゥーナシュというユダヤ教徒がイスラーム国家の宮廷でいかなる役割を担っていたのかを解明する手がかりを与えてくれる

と考えられる。そこで、校訂された本作品のアラビア語テキストを用いて、ドゥーナシュの知的活動の総体を、現存するそのほかの2著作を含めて明らかにすることで、ファティマ朝というイスラーム、ユダヤ教、およびキリスト教の混在した多宗教かつ多文化環境での文化交流の実際をつまびらかにすることも目指した。

3. 研究の方法

まず『天球について』アラビア語本文の校訂を進めた。以上の作業を経てそのアラビア語原典の校訂版を完成させた後は、ロンドン・ウォーバーク研究所チャールズ・バーネット教授の協力のもと、本作品全体の英訳を行った。さらに、アラビア語原典を精読し、ラテン語版と比較することで、アリストテレス哲学のイスラーム世界および中世ラテン世界での受容の最初期の状況を解明しようとした。加えて、著者ドゥーナシュの現存するそのほかの2作品も含めて彼の知的履歴の総体をつまびらかにすることで、ファティマ朝という多宗教文化におけるユダヤ教徒ドゥーナシュの宮廷科学者としての生き方を明らかにしようとした。

4. 研究成果

『天球について』アラビア語テキストの校訂とその英訳の全体を完成させた。加えて、7月にブラジルで開催された国際科学史学会に参加し、29年度前半で完成させた『天球について』全テキストを踏まえて本作品の分析することで得られたドゥーナシュの宮廷科学者としての役割に関する研究成果を発表した。具体的には、『天球について』においてドゥーナシュは天体運動を含めた自然現象の発生過程をギリシャ哲学や天文学の知識を使って合理的に説明することで、この世の全自然現象が合理的にプログラムされていることを明示した。そうすることで、このような合理的で素晴らしい世界を創造できるのは、全知全能の唯一神しか不可能である、という議論を展開し、神の一性を証明しようとしたことが分かった。いわば、一神教であるイスラーム擁護の一環として、ドゥーナシュは天文現象の合理的な説明を用いたといえる。さらに、本発表を通じてフロアーからコメントをもらうことで、ドゥーナシュの占星術への批判的な態度の背景がより鮮明になった。当時、宮廷が占星術の禁止を表明しており、その流れに乗って、ドゥーナシュも占星術に懐疑的な論調を本書で表明したことが分かってきた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 9 件)

Taro Mimura, "Too Many Arabic Treatises on the Operation of the Astrolabe in the Medieval Islamic World-Athīr al-Dīn al-Abharī's Treatise on Knowing the Astrolabe and His Editorial Method", *Medieval Encounters* 23 (2017), 365-403、査読有。

Taro Mimura, "Comparing Interpretative Notes in the Syriac and Arabic Translations of the Hippocratic Aphorisms", *Aramaic Studies* 15 (2017), 183-199、査読有。

Taro Mimura, "A Reconsideration of the Authorship of the Syriac Hippocratic Aphorisms: The Creation of the Syro-Arabic Bilingual Manuscript of the Aphorisms in the Tradition of Ḥunayn ibn Isḥāq's Arabic Translation", *Oriens* 45 (2017), 80-104、査読有。

Nicola Carpentieri and Taro Mimura, "Arabic Commentaries on the Hippocratic Aphorism vi.11: a Medieval Medical Debate on Phrenitis", *Oriens* 45 (2017), 176-202、査読有。

Peter E. Pormann, Samuel Barry, Nicola Carpentieri, Elaine van Dalen, Kamran I. Karimullah, Taro Mimura, and Hammood Obaid, "The Enigma of Arabic and Hebrew Palladius", *Intellectual History of the Islamicate World* 5 (2017), 252-310、査読有。

Taro Mimura, "Review: Bos, *Maimonides Medical Aphorisms*", *Medical History* 61 (2017), 137-139、査読無。

三村太郎「〔読書案内〕イスラーム科学とは何か」『歴史と地理：世界史の研究』第708号(2017年)、34-37、査読無。

三村太郎「アッバース朝とインド天文学を結んだシルクロード」『科学』(岩波書店) 87巻10号(2017年)、936-939、査読無。

Taro Mimura, "Ḥunayn ibn Isḥāq and the Text of the Hippocratic Aphorisms", *Galenos: Rivista di filologia dei testi medici antichi* 10 (2016), 67-71、査読有。

〔学会発表〕(計 6 件)

三村太郎「イスラーム天文学史から見た回回暦」第21回科学史西日本研究大会、追手門学院大手前ホール、2017年12月10日。

Taro Mimura, "Scholarly Exchanges in the Marāgha Observatory: Reassessment

of ‘Urđī’ s Impact on Marāgha Associates ”, at the International Conference on Traditional Sciences in Asia 2017 “ East-West Encounter in the Science of Heaven and Earth ”, at Kyoto University, 25-28 October 2017.

Taro Mimura, “ Astronomical Proof of the One God in (ps.) Māshā’ allāh’ s Liber de orbe ”, the 25th International Congress of History of Science and Technology (ICHST), Rio de Janeiro, 23-29 July 2017.

三村太郎「中世イスラーム世界に女性医学者は存在したのか？ タバリー『ヒッポクラテスの治療』での証言を通して」日本科学史学会、第54回年会、香川大学、2017年5月3～4日。

Taro Mimura, “ The importance of Indian Astronomy in the Formation of Islamic Astronomy ”, at the International Seminar “ Islam and Multiculturalism: History, Challenges and Prospects ”, at Waseda University, 3-4 December 2016.

三村太郎「ラテン語版(擬)マーシャーフ『天球について』アラビア語原典の発見 その経緯と今後」日本科学史学会京都支部例会、京都大学人文科学研究所、2016年7月9日。

〔図書〕(計 2件)

Taro Mimura, “ The Importance of Indian Astronomy for the Formation of Islamic Astronomy ”, *Islam and Multiculturalism*, ed. by Keiko Sakai, Tokyo: Waseda University Organization for Islamic Area Studies, 2016, 39-47.

三村太郎「伝統と改良の狭間で アヴィセンナ以後のギリシャの学問教授の展開」佐藤直子編『中世における制度と知』知泉書院、2016、3-33。

6. 研究組織

(1)研究代表者

三村 太郎 (MIMURA TARO)

広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：50782132